

思考の活性化を促す

AL型場づくりと発問を実践する

生徒の志望特性、そして担当教科の異なる2人の教師が、これまで行ってきたALを土台に、座談会での学びを生かしながら、より生徒の思考を活性化するためのAL型授業を実践。授業レポートと併せて、それぞれが語る更なる授業改善への展望を紹介する。

事例1 富山県・私立片山学園中学・高校 森内梨絵 〈国語〉

ルールの徹底によるグループワークの活性化と自己採点での学びの個別化を目指す

話し合いを活性化するためルールを明示

「入試本番だと思って、集中して解いてください！」

森内梨絵先生の言葉を合図に、教室には静寂が訪れ、まさに試験会場のような緊張感が張り詰める。この日の授業は、3年生文系クラスの現代文の演習(図1)。毎回、森内先生

が作成したプリントを使って授業は進められる。今回は、サンIIテグジュペリの『人間の土地』の一節を素材文とした読解問題だ。

生徒が取り組んだのは、プリント中の1000字程度の素材文を読み、文中の比喩表現について説明する問題。まずはこの1問に10分間集中して各自で取り組む。その間、森内先生は机間巡視を行い、生徒たちがど

れだけ解答できているか、どこでつまづいているかを確認していく。

10分が経過した段階で、個人ワークは終了。すぐに4人ずつのグループになって、グループワークが始まった。目標は「満点解答」の作成だ。

今回はグループワークに先立って、「1人1回は必ず話そう」「相手の意見をしっかりと聞いた上で自分の意見を述べよう」「全員の納得・理解を目

10分間の個人ワークがスタート。机間巡視で生徒の理解を把握する。

指そう」という「グループワークの3つのルール」を森内先生が説明し、ルールが書かれた紙が黒板に掲示された。今回の授業では、思考を深めやすい場づくりとして、生徒一人ひ

図1 森内先生の授業デザインシート〈3年生・現代文〉

【教科・科目】国語・国語探究(学校設定科目) 【分野・単元】評論・記述演習

【テーマ・作品】『飛行機と地球』(サン＝テグジュペリ)

【設定時数】1時限(50分)完結 【本時全体の目標】比喩表現を一般的な言葉で言い換える

| 学習内容 | 自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標(身に付けさせたい力・姿勢) | 左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類 | 左記の力・姿勢を育むための指導内容 | 教師による発問・働き掛けの内容 | 教師が特に観察・配慮すべき点 |
|----------------|--|----------------------|---|--|--|
| 問題演習 | 制限時間内で本文読解と設問に挑む集中力 | 技能 思考力・表現力 | 演習プリントを配布し、10分間個々に取り組む。 | 入試本番と同じ気持ちで、真剣勝負で挑むように伝える。 | 時間内に出来上がった生徒には、分からない語句調べなどの作業を課し、時間を有意義に使わせる。 |
| 満点解答の作成 | 自分の解答・考えを他者に伝える力 | 表現力 主体性 | ・グループ学習時のグラドルールを確認・徹底する。 ・全員が参加できるよう、役割を与える。 ・解答要素の必要理由を考え、班メンバー全員の理解と合意を目指す。 | 班での活動が円滑に進むよう、適宜支援する。 | 主導権を握ってしまう生徒、周囲の意見に安易に同調して参加を放棄している生徒がいないか、配慮する。 |
| | 他者の意見を尊重し、傾聴する力 | 多様性・協働性 | | | |
| | 班で協力して問題を解決する力 | 思考力 多様性・協働性 | | | |
| 作成した満点解答を比較・検討 | 自他の解答を読み比べ、客観的に評価する力 | 思考力・判断力 | 黒板に並んだ解答から、自分が最も良いと思う解答を1つ選ばせる。その際、理由も明確に述べられるよう指示する。 | 自分たちが作成した解答への執着を捨て、全てを公平に比較検討するよう伝える。 | 選んだ理由を、大きな声で分かりやすく説明できているか判断する。 |
| 「今日の満点解答」を完成 | 教員の説明をしっかりと聞き、理解する力 | 技能 思考力 主体性 | 教員が、生徒の意見をまとめながら、解答に必要な要素の確認と、より良い表現について理由と共に説明していく。 | 分からないことがあれば質問するようにあらかじめ案内し、個々の生徒の能動的学習態度を促す。 | 教室全体の雰囲気や生徒の表情から理解度を確認しつつ説明する。 |
| 自分の解答を自己採点 | 自分の解答を採点者として読み直す批判力 | 技能 思考力 | 最初の自分の解答に戻り、教員の示した採点基準に沿って自己採点しながら、自分に足りなかった視点や語彙を学ぶ。 | 採点しにくい箇所・不明点などは、個々に質問するように指示する。 | 生徒同士で相談している場合は、様子を見て支援する。 |

とりがファシリテーターになって、グループ内で思考を活性化しやすい環境をつくるために、前掲の座談会での気付きを生かし、いつもは口頭のみで説明していた「グループワークにおけるルール」を初めて明確に提示したのだ。

「今回、グループワークを進める上での3つのルールを設定しましたが、そこには『他者を否定しない』というルールは盛り込みませんでした。答えが1つではないテーマについて自由に話し合うのであれば、『他者を否定しない』というルールが必要だと思いますが、今回の授業は評論の読解問題ですので、答えを1つに定めなくてはなりません。そのため、『他者を否定しない』というルールをつくと、間違った意見や考えをそのまま受け入れることにもなりかねず、正解が導けなくなる恐れがあったからです。ただ、『相手の意見はしっかりと聞いた上で』というルールは盛り込みました。ルールは授業の目標によっても変わっていくものだと思います」(森内先生)

フラットな関係で話し合いに全員が責任を持つ

いつもの演習では、「司会進行役」「書記」「タイムキーパー」「議論の口火を切る係」の4役がグループ内で割り振られる。だが、この日の授業では、司会進行役を廃して、その代わりに「ルール徹底・確認係」を設けた。フラットな関係での話し合いを促進するため、あえてリーダー役をつくらなかったのだ。

その結果、この日のグループ活動の雰囲気は普段とは明らかに違っていたという。いつもは、司会進行役の生徒がどんどん作業を進めていたり、国語が得意な生徒が自分の考えをずっと語ったりする場面が見られるそうだが、今回は国語の得意な生徒が苦手な生徒に説明をして、「これで良いと思う?」と確認するなど、みんなで一生懸命に考え、全員が納得・理解を目指そうとしていた。

「授業後、生徒に聞いたところ、グループワークのルールはいつも以上にきちんと意識したそうです。国

語の得意な生徒は、『自分の解答に執着せず、他の人の意見も聞こうと心掛けた』と話していましたし、国語が苦手な生徒は、『発言しなければいけないという責任を感じたし、いつもより自分の意見を聞いてもらえる雰囲気があった』と振り返っていました。ルールはうまく機能していたと思います」（森内先生）

個別のアドバイスで 学びのわくわく感を維持

グループワークに先立って、みんなで考えた満点解答を記入する用紙を配布。これまでは代表者が前に出てきて黒板に解答を書いていたが、その時間を短縮できるよう、今回は、解答を書いた用紙を黒板にテープで貼り付けるようにした。

グループワークの冒頭、森内先生から、比喩表現について説明する際の注意点が説明された上で、各班で10分間の検討がスタートする。

「グループワーク前に、生徒に解答の方向性を示す場面は、思考を活性化させられるかどうかの重要な場面」と森内先生。あまりに方向性を示さないと、全く歯が立たず、議論

今回はグループワークの進め方を徹底したため、発言する生徒が偏ることなく議論が活性化した。

は活性化しない。かと言って、グループワークがスムーズになることを重視してヒントを出し過ぎると、「分かったー」というわくわく感が少なくなり、特に成績上位層の生徒にとってはつまらない授業になってしまうからだ。

「今回は素材文もやや難しかったこともあり、生徒があまり解答を書けていないことは、個人ワーク中の机間巡視で確認できていました。そこで、グループワーク前の説明に加えて、グループワークの最中にも、比喩表現を更に比喩表現で説明してしまっているようなグループを中心に

に、個別にアドバイスするようにしました。1人で解答を書いていた時はあまり書いていなくても、グループで話し合ううちに納得した表情を見せる生徒が多く見られたので、答えにたどり着く喜びはある程度確保できたと思います」（森内先生）

グループワークの成果を 整理する工夫が必要

グループワークが残り1分となったところで、森内先生が生徒たちに、解答用紙への記入と、記入を終えた解答用紙の黒板への掲示を促す。ところが、生徒はなかなか意見をまとめられず、タイムキーパー役の生徒も時間を気にしながらも、結局は一緒になって議論を続けていた。結局、全てのグループが解答を掲示したのから、予定よりも3分程オーバーしてからだ。

「良い解答をつくりたいという気持ちは分かりますが、3年生の演習である以上は、時間を意識して作業することも大切です。次の授業では、話し合いで出てきた解答要素を書き出す付せん紙を複数枚準備し、思いつくままにどんどんと書き出させる

ようにすると共に、グループ全員で共有しやすいように工夫しようと思います」（森内先生）

全ての解答が出そろったところで、一番良いと思われる解答に挙手を求める。生徒の意見があまり割れなかったのは、満点解答としてうまくは書けなかったグループも、「この言葉が必要だった」といった大きな方針は理解できていたからだろう。グループワークに入る前の説明、そしてグループワーク中の机間巡視での森内先生のアドバイスが功を奏したようだ。

その後、数人の生徒に自分がなぜその解答を選んだのかの理由を聞き、満点解答として欠かせない観点や表現などを森内先生が解説。最後に、今回の問題の採点基準と部分点を森内先生が説明し、生徒に自分の解答を採点させ、50分間の授業が終了した。

考え続けるモヤモヤ感と 納得感を両立したい

今回の授業では、グループでの学びの成果を個々の学びへと還元するため、いつもはグループの解答を森

各グループから出された解答を森内先生が解説していく。解答用紙の下の数字は、満点解答として支持し、挙手した生徒の人数。



各グループで意見をまとめる。しかし、盛り上がりすぎて集約するまでに時間が掛かり、予定時間を3分程超過した。

内先生が採点していたところを、生徒に自分の解答を採点させるようにした。これも、前掲の座談会を経て、森内先生が挑戦した新しい試みだ。「普段の演習でも、解答は必要

素を簡条書きし、口頭で説明するだけで、美しい模範解答を板書することは基本的にしていません。生徒が私の解答だけを絶対だと思ってしまう、自分たちの解答を確認するよりも、私の解答を書き写すことに関心が向いてしまうことがないようにするためです」(森内先生)

普段は、グループでつくった解答を森内先生が補足説明を加えながら採点するため、生徒たちのほとんどは納得した表情をしていたという。しかし、今回は学びの成果を個別化して授業を終えることを目的に、生徒が自分の解答を採点するように変更したためか、生徒はいつもよりすっきりしていない表情だった気がする。森内先生は振り返る。

「おそらく、グループワークでの学びの充実感を、個別の学びへうまくつなげられなかったのではないのでしょうか。それなりにうまくまとまったグループの解答から未熟な自分の解答へ立ち返るには、生徒に気持ちと頭の切り替えをさせる声掛けが必要でした」(森内先生)

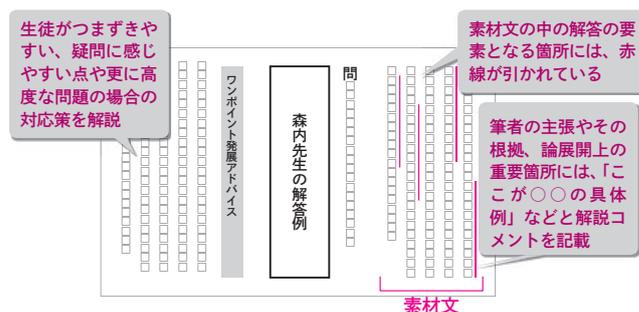
今回の授業を通して、森内先生は「生徒の思考が活性化しやすいのは、最後の自己採点時ではなく、みんなが話し合ってから採点している『動の学び』の時間だと感じた」と話す。

「特に国語が苦手な生徒ほど、みんなまで考えることを楽しむ中で、国語の学習に対して前向きな気持ちを持ち続けられます。だからこそ、グループワークの時間を出来るだけ確保するような工夫が必要です。その上で、グループワークに時間を割きながら学びを個別化するため、授業の最後に詳細な解説を書き込んだ模範解答を配布して(図2)、復習として個々に自己採点できる道具を用意すれば、自分の解答に立ち戻ってみるという『静の学び』にスムーズに移行できそうです。次の授業から試してみます」(森内先生)

授業を振り返り、明らかになった課題を解決するためにまた工夫を重ねる。ALを通じた森内先生の授業改善は続く。

個別の学びへ移行できた生徒は自身の抱える「モヤモヤ感」を解消すべく、授業後に質問に来た。

図2 森内先生作成の「モヤモヤすっきりシート」



森内先生は、生徒が1人で振り返りしやすいよう、授業終了時に、上記のような解説や模範解答を記載したシート(A4版)を配布することにしたという。